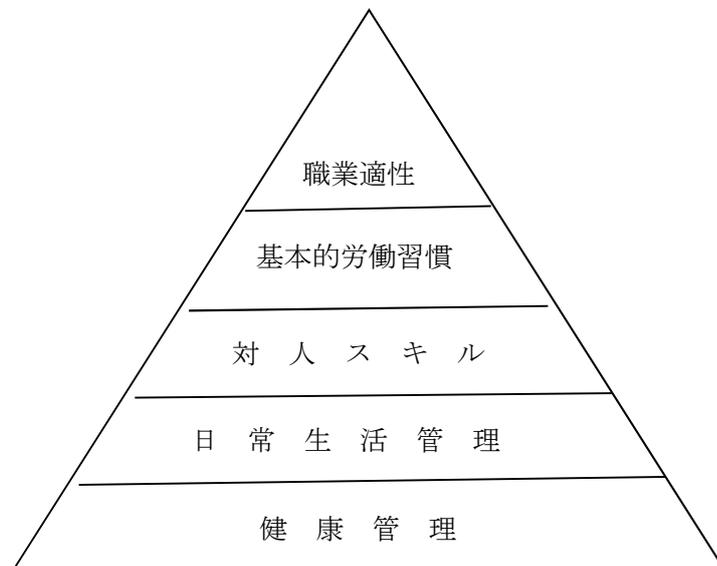


令和元年度就労準備性チェックリストの取組とその考察について

1 就労準備性とは

就労準備性とは働くことについての理解・生活習慣・作業遂行能力や対人関係のスキルなど働くための基礎的な能力のことである。これらは職種・障がいの有無を問わず、働く上で必要とされる力である。働く、働き続けるためにはこれら5つ「健康管理」「日常生活管理」「対人スキル」「基本的労働習慣」「職業適性」の事柄に対する能力が必要となる。また、障がいの有無に関わらず、人が就業する上で必要とされる能力を順番に並べたものが「就労準備性ピラミッド」である。仮に適性のある職業についていたとしても、どんなに作業能力が高くてもピラミッドの底辺から順にしっかりと備わってないと働き続けることは難しいと言われている。5項目のどこが不十分なのかはこれまでの生徒それぞれの経験により異なるが、習得しなければならない5項目能力の順序が大きく入れ替わることはない。

本校の職業教育は開校時より職業的な力だけではなく、社会人としての基礎的な力を育てることを教育の土台として取り組んできている。この就労準備性ピラミッドのチェックリストは、本来なら生徒個人個人のものであり、集団で検討することについて賛否はあると思われるが、本校の教育の方針でもあるので、敢えて集団での検討を図るものとする。



2 方法

(1) 対象者

1年生～3年生全生徒

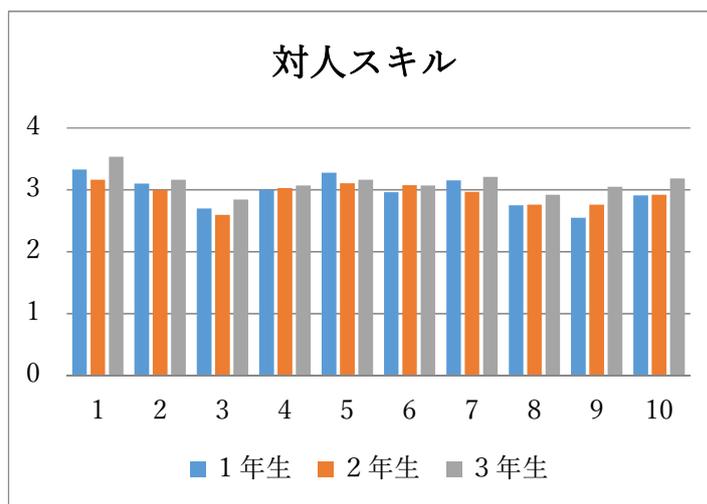
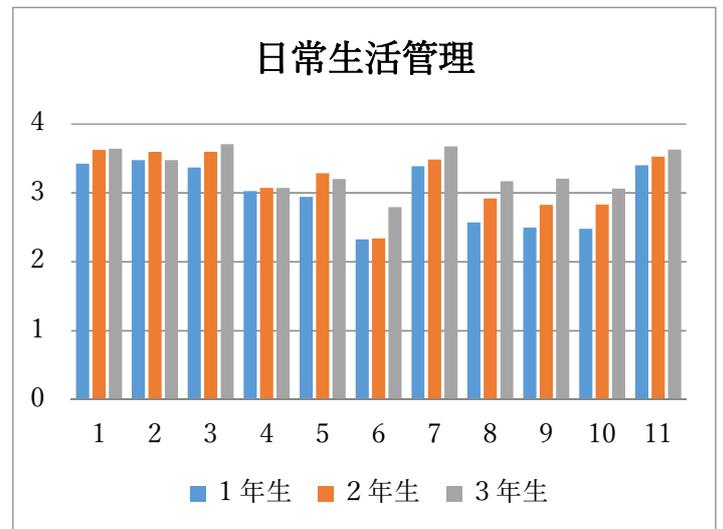
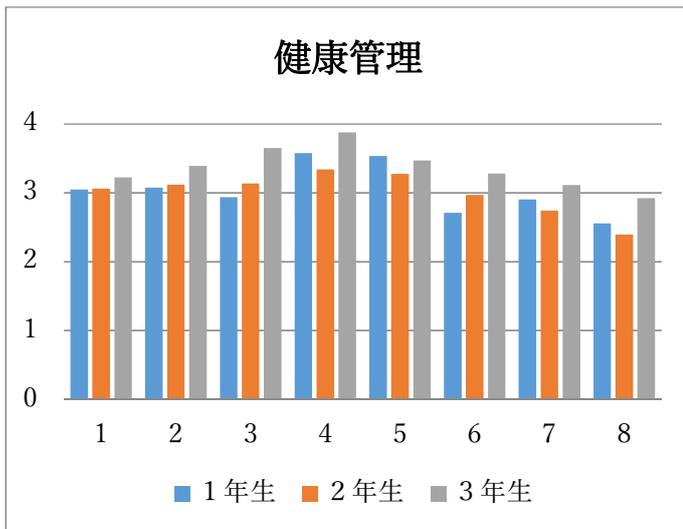
(2) 実施時期

令和2年1月～2月の間で各学年の「職業自立」の時間に実施した。なお、本チェックリストは生徒が個人個人が自己評価している。

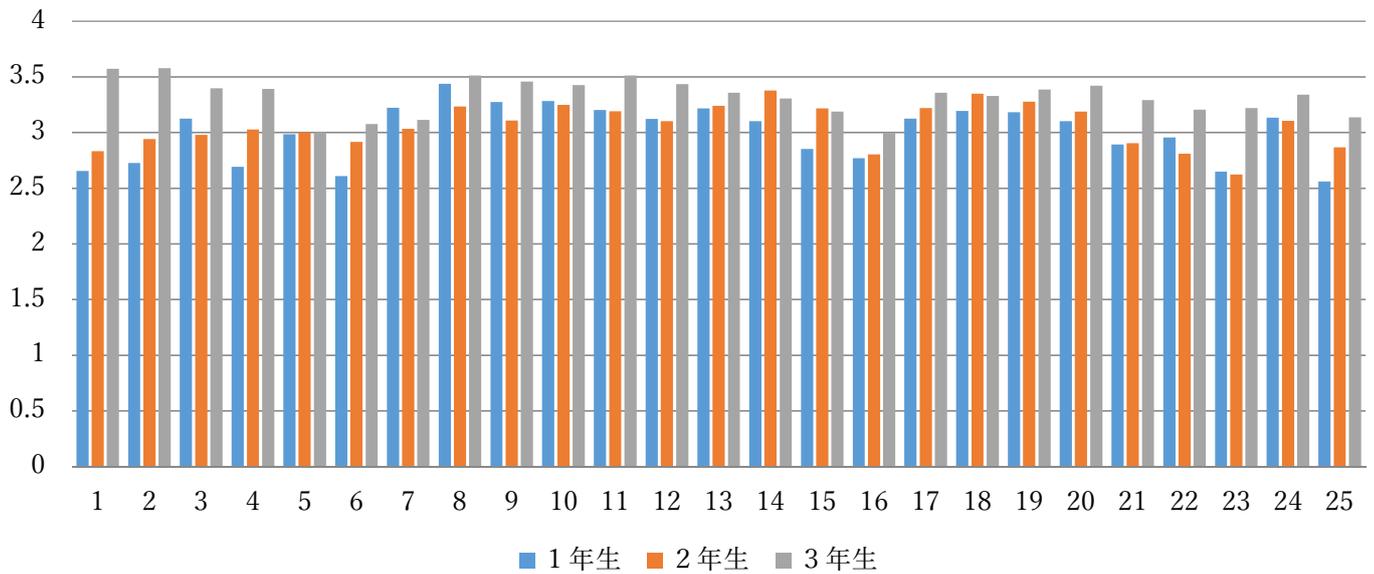
3 結果及びその考察

本結果は、横断的検討と縦断的検討の2つの視点で検討を行った。本来、「職業準備性の能力」については、個人個人が今までどのような経験をし、学んできたかによって積み上がっていくものであると言われているので、縦断的検討のみでよいのだが、昨年度、学年進行での検討を行ったので、今年度も実施することとした。横断的検討では各学年の比較を、縦断的検討では、2年生と3年生において前年度比較を行った。

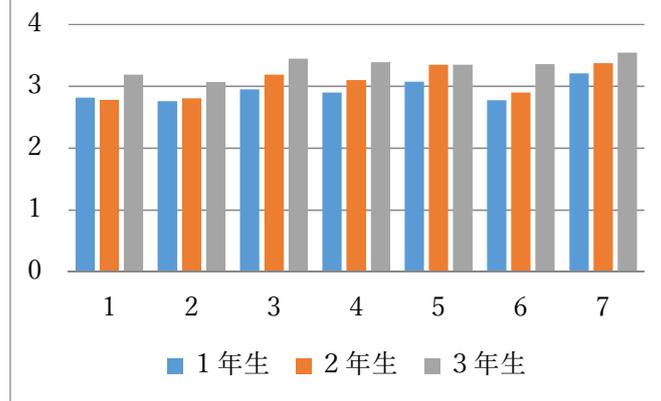
(1) 各領域についての学年ごとの比較



基本的労働習慣



職業適性



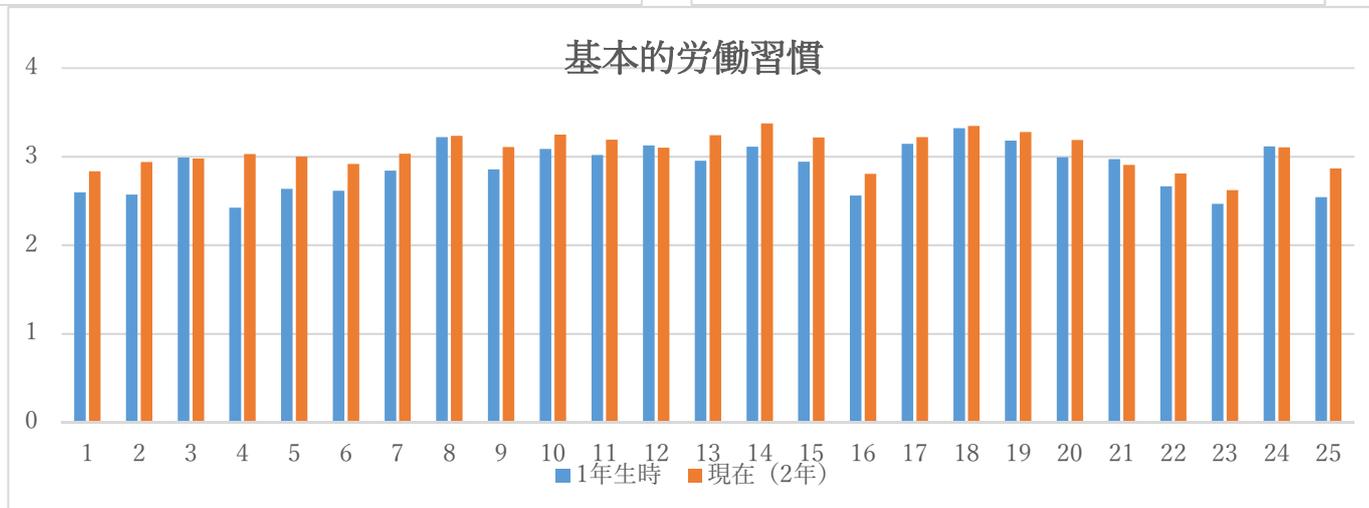
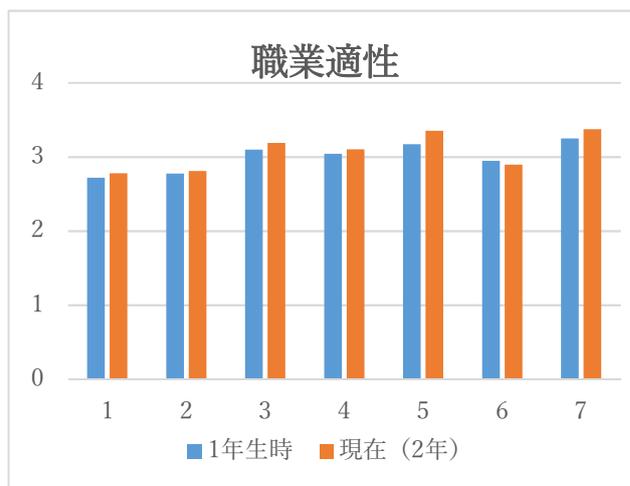
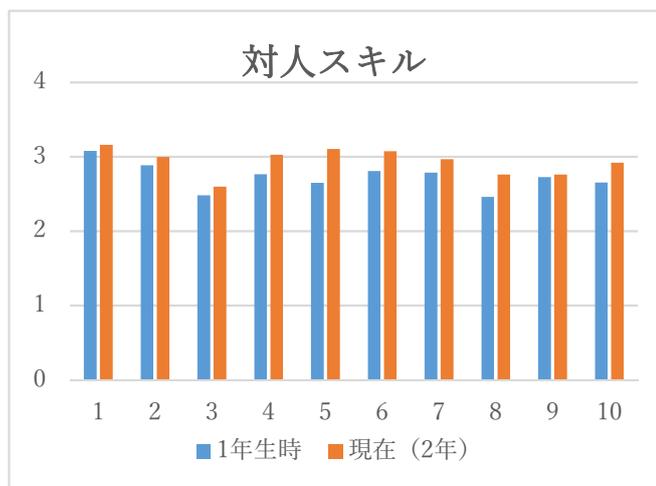
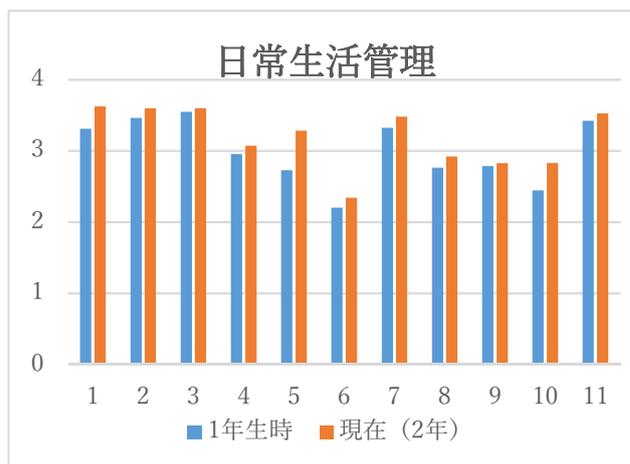
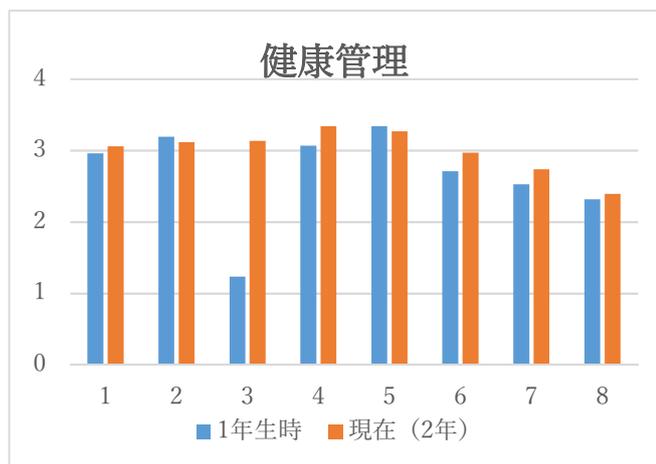
【考察】

今回の結果では、やはり横断的検討では何らかの傾向は見られなかった。1年生の結果が他学年と比較して高い得点にはなっているが、1年生が他学年よりも職業経験が豊かで、高い職業観があるかという点と1年生の実態から鑑みてそのような仮説を立てることは難しい。どちらかという点とまだまだ客観的な自己評価を行うことが難しい段階にある生徒が多いように考えられる。(ピアジェのいう前操作期にある場合は、物事の多様な側面を同時に認識することが難しく、知覚的に顕著な部分で焦点化した情報処理をしてしまう。よって、その段階にある場合は能力と努力、理想と現実、自己と他者あるいはポジティブとネガティブといった両面性を同時に関連づけて理解することが困難であり、その結果、現実でない過大な自己評価を招くことになると考えられている。) 今後は客観的な自己評価ができる段階であるかどうかについても検討した上で、チェックリストを実施すべきである。

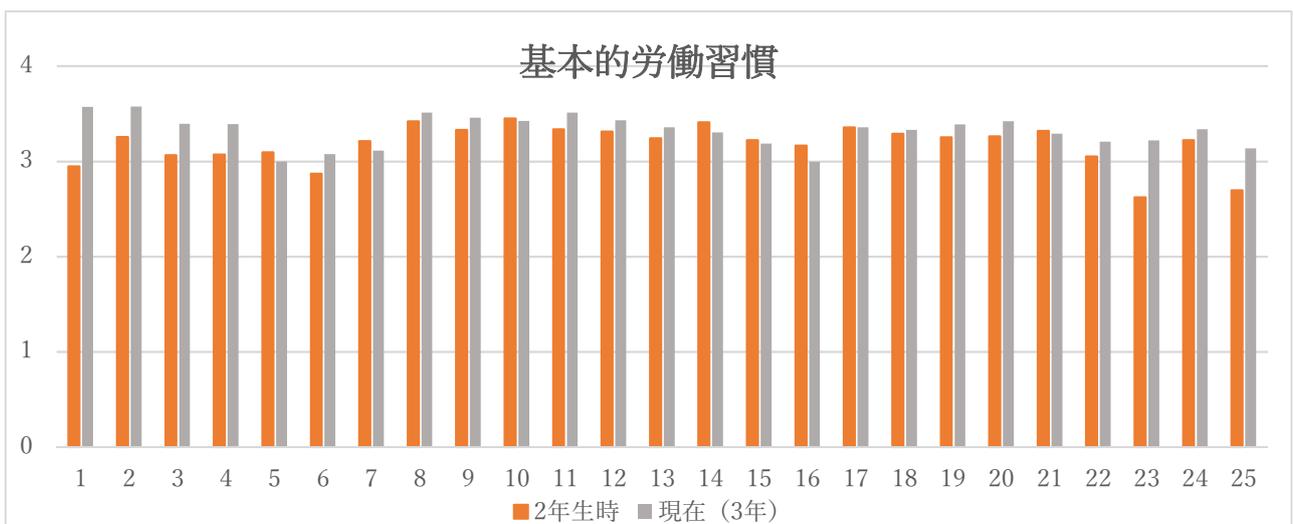
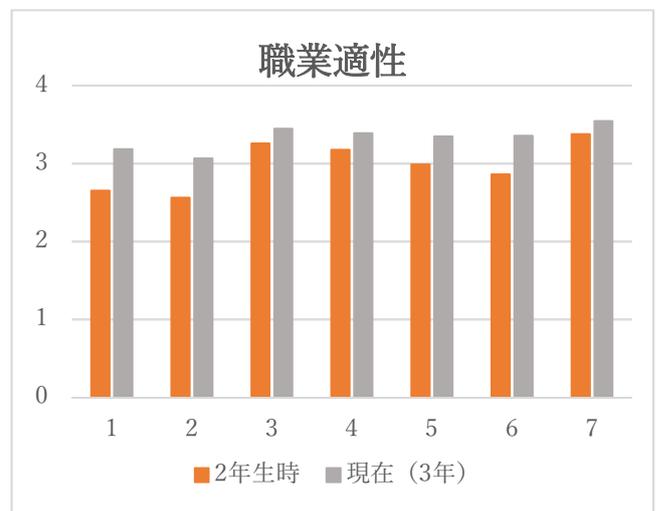
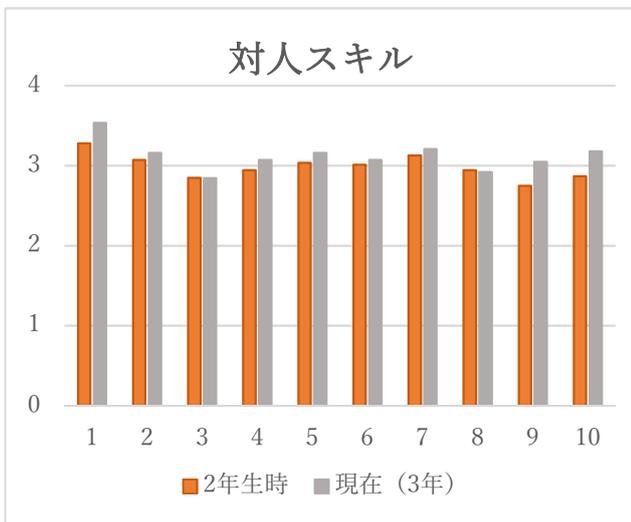
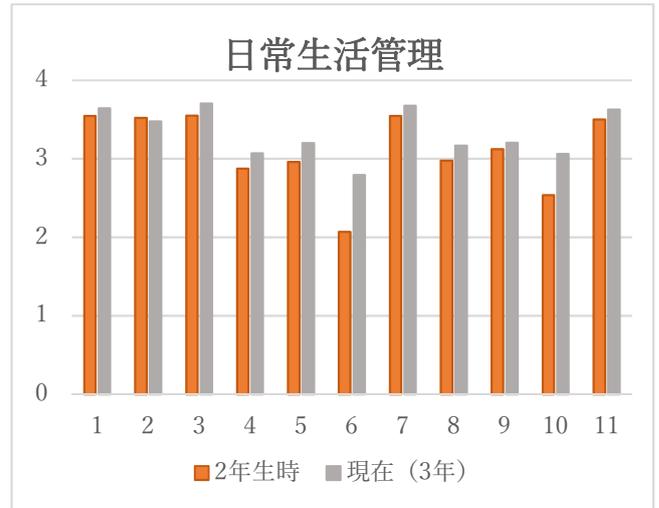
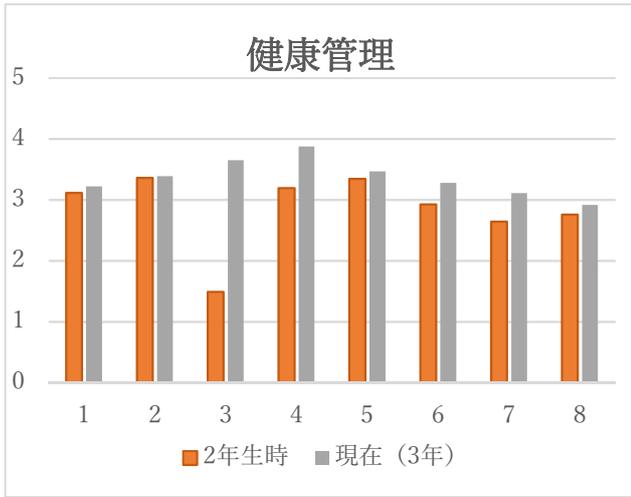
また、本校は県内全域から生徒が通ってくるため生徒の実態も多様である。その中で指導を行っていくためには、学校教育の中での合理的配慮についての視点を教職員ももちつつ、指導を行っていく必要がある。

(2) 学年ごとの前年度の比較

① 2年生



② 3年生



【考察】

2年生も3年生も前年時よりもどの領域も得点が上がっていた。本校の職業教育が職業的な技術力だけでなく社会人としての基礎的な力を育てていることが分かった。これは、日々の教育の積み重ねにより、このような成果が生じたものと思われる。また、この能力は学校教育において企業側が育てて欲しい力として掲げてあるものでもある。昨年度、「健康管理」については3年間の学校教育の中では学びの成果が出にくいと考えていたが、3年間の職業教育を通して生徒自らが自分の意識を変えることにより学校教育では直接的な指導が困難な項目についても成果が見られることが分かった。つまり、生徒の職業観を育てることにより、生徒の意識を変革し、職業人として育てることができると考えられる。なお、「障がいの理解」、「障がい受容」、「自分の強みや弱み」については将来職業生活を送る上で自己理解できていることが、働き続けるためにも必要であり、今後も職業自立や自立活動等の時間を通して学んでいくことが重要である。

「日常生活管理」においても学習の成果が現れている。ただし、生活費や給料等の金銭のこと、言葉遣いやマナーについては低い得点となっているので3年間を通して継続した指導が必要である。また、効果的な指導を行うためにも各教科間の連携を行い、基礎的・基本的な幅広い意味での学力を身に付けていく必要がある。

「対人スキル」についても学習の成果がしっかりと現れている。得点の低い部分については国語、特別活動、職業自立、自立活動等において敬語の正しい使い方や自分の思いを他者に伝える技法、エンカウンターやソーシャルスキル等の手法を用いながらコミュニケーション能力の向上を目指していく必要がある。

「基本的な労働習慣」についても3年間の学習の成果が現れている。専門教科、総合的な探究の時間、職業自立（現場実習を含む）の中で学んだことが中心とはなるが、自分のもっている強みや弱みをしっかりと理解して、働くためのより良い習慣をつけることがなお一層必要になってくる。

最後に「職業適性」についてであるが、特に3年生では高い得点を示していた。ここでは職場において柔軟に対応できること、臨機応変に対応できることが求められている。就職を目前とした3年生でこの領域において高い得点を示すことは自信をもって就職していくという証でもある。できない時にどのような支援や対応をして欲しいのか生徒自らが他者に伝えられる力をつけておくことも必要であり、そのためにも幅広い意味での学力が必要となってくると考えられる。一方で、この領域については本来、知的障がいのある本校生徒には難しい内容でもある。そのため今後も障がいの特性等について企業側に啓発していく必要がある。

（3）寄宿舎での指導

寄宿舎生で「健康管理」「日常生活管理」の領域が得点が上がっている生徒が多かった。寄宿舎においては日々、丁寧な日常生活における指導が行われており、その成果だと考えられる。特に、3年生においては、入舎しているほぼ全員の得点がこの2領域で上がっている。日常生活における指導は1年間では成果が上がるものではなく、3年間という長い間一貫した指導を通じて獲得していくものであると思われる。一方で教育的入舎の生徒においては「健康管理」「日常生活管理」の得点の上がり方が大きく、短時間で指導の成果が見られている。これは、入舎時において寄宿舎指導員が焦点的で意図

的に丁寧な指導がなされていたものと考えられる。つまり、寄宿舎の指導と学校教育とが両輪となって生徒の職業観が高まっていくと考えられる。